IC たより

（社）国際 IC 日本協会機関紙

Building trust across the world's divides

Initiatives of Change Japan

発行年月日　2010 年 9 月 15 日
発行所　（社）国際 IC 日本協会
〒 156-0055　東京都世田谷区船橋 1-54-14
TEL：03-5429-1156　FAX：03-5429-1157
E-Mail：info@jp.iofc.org
HP：www.jp.iofc.org

頒価　1 部 100 円

6

◇目次◇

特集　学校訪問プログラム 2010
APYC 報告
AP チームの日本滞在感想
スイス国際会議報告
IC 今月のひとこと
【予告】IC セミナー（ミニ HOHO）

2010 年 学校訪問レポート

IC の国際青年リーダー育成プログラムの訓練を受けた青年たち 5 名を招へい、国際ボランティアグループとして 2 ヶ月半に亘り各地の学校等を訪問し、国際理解と心を育てるための活動を行いました

2010 年の学校訪問は、26 校を回ることができました。昨年に続いて東京、横浜、小田原、そして、福岡に加え、新たに世田谷 IC ハウス近隣の小学校を始め、つくば市、北九州市、大宰府市、広島市、大垣市、そして京都市の小学校や高校・大学へも広がりました。

ある小学校では「今朝、皆さんが来られる前に、ある保護者から『子供が父親と言い争いをしたまま学校に行ってしまったので心配しています』という電話がありました。皆さんがどのように家庭の融和をもたらすことができるかというテーマの寸劇を見せて下さった正にそのクラスにその子もいたのです。きっと良い影響があったと思います。皆さんは絶妙のタイミングで来て下さいました」と終了後、副校長は感想を述べた。

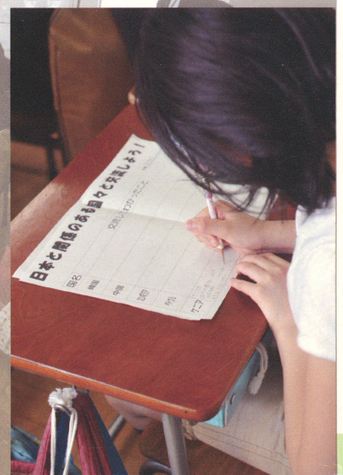
九州で訪れた学校での先生のコメント
「私たちがもし同じ事を言っても、子供たちはただお説教のように受け止めてしまうでしょうが、皆さんから話して頂くと、子供たちも本当に素直に耳を傾けてくれます」

大宰府市立水城小学校では、4 年生 120 名の生徒たちによる、歌と花笠音頭の元気にあふれた素晴らしいパフォーマンスを AP チームのために見せてくれた。

広島修道大学学生との交流
中国やアメリカからの留学生を含む約 30 名の学生が参加。学生たちはＡＰチームの話を聞き、カンボジア・ベトナムの対話など、それぞれの国で行っている IC の活動に関心を深めた。

スティーブン・リーパー広島平和文化センター理事長との会見
1 時間 20 分に亘り意見交換を図る。「皆さんは平和の文化を伝えており、人類が存亡の岐路に立っている今、それがとても大切なことなのです」と激励した。

大垣市では東京のＩＣＵ訪問をきっかけに出会ったブラジル人の誘いで、日系ブラジル人学校 Hiro 学園を訪問。ここでは、英語→日本語→ポルトガル語の通訳を行った。ヨーロッパ系、アフリカ系、アジア系と色々な血が混じった生徒がおり、日本社会への適応等に努める生徒たちから熱い歓迎を受けた。



国際ボランティアグループ (AP チーム) 訪問校

《小田原市》芦子小学校・三の丸小学校・矢作小学校・国府津小学校・片浦小学校・下府中小学校・山王小学校・久野小学校・東富水小学校・マロニエ学級（中学校）、《東京地区》杉並区立沓掛小学校、世田谷区立希望が丘小学校、国際基督教大学、啓明学園（初等高等学校）、一橋大学、桐蔭横浜大学、《茨城》つくば市立上郷小学校、《福岡》北九州市立門司特別支援学校・大宰府市立水城小学校・西南女学院大学・香蘭女子短期大学・ILP お茶の水医療福祉専門学校・中村学園短期大学、《広島》広島修道大学、《岐阜》Hiro 学園（在日ブラジル人学校）、《京都》京都市立大藪小学校（以上、26 校）◎今年も多くの学校へ訪問することができました。各地でのご歓迎有難うございました。来年も国際ボランティアグループの訪問を受け入れて下さる学校を募集しています。国際 IC 日本協会 TEL03-5429-1156 までお問い合わせ下さい。

＊各国代表の自己紹介、国旗や文化（衣服や遊び等）・歴史の紹介、体を使ったゲームや踊り等を通して楽しく交流をしました。後日沓掛小学校 6 年生のみんなから「国際ボランティア」へ感激の声が寄せられました。

・ぼくが、この勉強で感じたことは、言語や文化、はだの色など、人はいろいろちがうことがあるけど、心がつながっているということに気付きました。今でも、国どうしのあらそいはあるけど、そんな人たちも、この考えに気付けば、争いごともなくなると思いました。こういう活動はずっとつづけていってほしいと思いました。
・世界の平和は自分の平和からと、他人のことを言う前にまず自分のことを見直すということを教えてもらって少し自分の考えが変わったと思います。これからも世界の平和をめざしてがんばってください。
・ぼくが一番心に残ったことは相手を指でさすと 3 本の指が自分のほうをむいているということです。もしも友達とけんかをするようなことがあれば、自分にも非があるのではないかとおもい自分をみつめなおしたいです。
・みなさんが実際に来て下さった時は「自分も日本の代表なんだ」と思い少し緊張していました。
・みなさんには、げきもやってくださって、これからは家族や友達に対して親切にしようかなと思いました。そういうことを気付かせてくれたことにも、とても感謝しています。
・来た人みんなが個性があり、とても世界が広いのを感じました。

高校生の感想より

・５人の歌に感動しました。歌声もとてもきれいでしたし、何より皆さん心から気持ちを込めて歌っていて、色々な国の人々なのに、何も壁など感じませんでした。最後に歌って下さったマハトマガンジーの詩を使ったという歌は、その言葉が歌声と共にジーンと心に響きました。音楽というのは人種を超えて皆を一つにし、人の生きているメッセージを伝えるのだなと改めて素敵だなと感じました。
・他国の情勢や文化、伝統等を知るのは大事だし、楽しかった。ただ知るのではなく、その国の人に直接目を見て聞き、質問したり、コミュニケーションをとったりすること、それを共有することが一番大事だと実感した。

・ケニアでは色んな種類の人たちがいて、言語も様々だそうです。そういう国際的なコミュニケーションについてすごく気になりました。
・他の国の環境や改善点等を話していたら、じゃあ日本はどうだろう？と自分の国についても考える機会となりました。
・こつこつと自国をいい国にしようと努める人たちが沢山いることを学びました。
・素敵な歌を有難うございました。私も暗闇を照らしていける様な人間になりたいです。
・「できると思ったことは一生懸命やればできるよ」という言葉が強く心に響きました。
・皆さん英語が上手で国が全く違っても一体感をすごく感じました。肌の色や人種など関係なく世界の人がそうなれたら良いなと思ったし、自分ももっと世界の色々な国の人と沢山関わりたいなと強く思いました。
・言いたいことが言えないで偉い人の言いなりでは、国は変わることができないと思いました。一人ひとりが意志を持ち、変えようとする努力をすることが大切なのだと教わりました。

アジア太平洋青年会議（APYC）体験報告

”チェンジ・コミットメント・アクション”

ーグローバリズムの時代に生きる我々の役割を探し求めてー

チェ・ヒジン（韓国 IC）

2年前初めて参加した第14回APYCは、韓国で開催されたが、ホスト国としてそして準備チームとして忙しいまま終わったのがとても残念だった。それで今年16回目のマレーシアで行われたAPYCには大きな希望を持って参加することを決めた。今回の大会には14ヵ国から100人の参加者が集まった。

特に毎朝7時からの静かな時間は一番大切にしたいと思っていた。一日目の‘静か’の意味‘SILENT’は、文字の順番を変えて‘聞く’という意味の‘LISTEN’に変わることを教えてくれた。‘静かになって自分の心の声に耳を傾ける’静かな時間の意味が、もっと心に入り込む瞬間だった。他には今年の会議の主題だった‘チェンジ・コミットメント・アクション’に関する色々な質問を挙げていき、それをグループで話し合った。私の情熱はどこにあるかから始まり、その情熱をどうやって使うべきか、どうやって行動に起こすべきか、お互いに意見を交換した。みんな若いのに自分の人生で一番大切なことが何かを探すことを怖がらない、逆に真っ直ぐ向き合っていた。その力をもらって私も次への一歩を踏み出す方向性を決めることができた。

最後の日には‘オープンスペース’というプログラムがあった。これは会議の参加者が、自分が持っているテーマを挙げ、皆と話し合えるチャンスをもらえる時間であった。色々な国から来た参加者の各々の立場で出し合った議題は、普段考えたことのないものであったが、自分が聞きたい、話し合いたいテーマのところに行って自由に討論した。私は挙げられたテーマを見て、インドネシアとマレーシアの間に存在する感情と、パキスタンの複雑な国の状況について分かるようになった。自分の周りの人間関係の中での問題とか、韓国と日本の間にも残っている感情とも違う観点からの話を聞くと、その中で自分が今まで気付かなかったことを知るようになる。今回も本当に学ぶ事が多い有意義な会議だった。

国際ボランティアチーム日本滞在記　2010年5月6日～7月18日

”ありがとうニッポン”

（ブンケン・ケンン／カンボジア、ジャカ／ベトナム、チェ・ヒジン／韓国、ケニヤ／ケニヤ、マーシー／中国、マーシー／フィジー）

5月初め、5人のメンバーがそれぞれの国から初めて来日し、ICハウスに2週間滞在しながらプレゼンテーションや歌、寸劇の練習を始めるところから、2ヶ月半のツアーが始まりました。

チームのまとめ役チェ・ヒジンさんは、既に日本に滞在していて、日本語が堪能です。それでも、最初のチーム作りは大変で、皆が心を開くようになるまで時間がかかりました。「大変な時もあり諦めそうになった瞬間もあったけど、自分の事を反省し、自分の弱いところを皆に隠さずに話した事で、色々な意見を聞けたのは良かったと思う。今はこのチームの一員であったことを誇りに思います」と語っています。

「学校訪問での、プレゼンテーションの中で数分間の『静かな時間』を持ち、その後子供達がすぐに手を挙げてシェアしてくれたことに感動した。また、生徒達がチームのために踊りを見せてくれた事も思い出です。子供達の笑顔から多くの希望を貰う事ができ、心の中が平穏になっていくのを感じた。子供達がすぐに打ち解けて遊ぼうとせがむことや沢山の質問を投げかけ、私達の国について興味がある事がわかり嬉しく感じた」とブンケンさんの印象です。

どの学校でも感銘を与えたのは、5つの異なる国の人々が一緒にプレゼンテーションする点でした。先生方の多くは、学生達の表情が明るくなり、生徒が変わっていく様に何より驚いていました。子供達にチャレンジ精神とチェンジを与える事が、子供達の教養と資質を伸ばす方法なのだと感じました。

ケニヤから来たマーシーは「多くの生徒達が初めての黒人と会う経験だったと思うのに、とても親しく接してくれた事が最高に嬉しかった」と語り、全員がホームステイした家庭とすばらしい思い出を共有出来たことを感謝しています。

日本人へのメッセージとして「日本の技術の高さと清潔な事に驚きました。電車やインターネット接続の良さも素晴らしいと思いました。しかし、日本の方はとてもシャイなところがあります。日本人は世界にもっと目を向けて、日本人のフィーリングをもっと世界と共有し、堂々と表現するべきだと思います」 と言う言葉を残してくれました。今、それぞれの国へ戻り、地域のリーダーとして活動を続けていることでしょう。

＊学校訪問プログラムの活動は、財団法人MRAハウスからの助成を受けて実現しました。

スイス・コー国際会議レポート

“Everybody Counts! エブリバディ・カウンツ!”

～一人ひとりを大切に～

2010年7月26日～8月2日開催

スイス・コー国際会議は、マウンテンハウスを舞台に”一人ひとりを大切に”のテーマの通り、年配の方から赤ちゃんまでごく自然に出会い、触れ合い、話し合い、世界全体がそこに入ってきたように感じられた。誰もが心を開いて、宗教や文化、国籍を乗り越えた空間が開けていました。朝のモーニングショーに始まり、ノルウェーの青年達が面白おかしく、ゲストを交えての30分間を演出します。北欧、東欧を含むヨーロッパ諸国、エジプト、ウガンダ等のアフリカ諸国、インド、日本等アジア諸国、レバノン他中東諸国、オーストラリア、数えきれない程の国々からの参加者を見事につないでいくリーダーシップには、驚きと胸に迫るものがありました。

毎日10時から2時間、8～10人に分かれて行うコミュニティーグループミーティングでは、各国の問題も垣間見え、また、一人ひとりが自身の抱えている問題を、恐れる事なく語り、その解決の経験や問題を提起していく方法で、参加者一人ひとりが心を開き、信頼関係を築くことができました。

小さな子供達は、ゲーム等遊びながら学び、夕方の全体会議の後半には、大人も子供も一緒に、その日得たものを分かち合います。孫の赤ちゃんを抱いた「ジーパ」（マイク・ブラウンさん）＆「ジーマ」（ジーン・ブラウンさん）が登場し、大人や子供にインタビューし、”一人ひとりを大切に”と言うテーマが、会場中に浸み渡るようでした。

また、ボランティア活動では、ベジタブル、サービング、クッキング、ハウスキーピングのチームに分かれてコー滞在を全員がサポートしますが、各チームではベテランスタッフが指導にあたります。ベジタブルチームのチーフである86歳のスイスの女性は、何十年もベジタブルの責任者を務めているそうです。そこで手伝っていた91歳の女性は、60年前に日本の代表団が初めてやって来た時、当時まだ青年だった中曽根康弘（元首相）さんが、「玉ねぎの皮を剥いていたら、ひょいと一片つまんで、生のまま食べてしまったのよ」等と昔話をしてくれました。パンを切るおじさんは、毎朝6時からパンを切る役目でしたが、その方がもう帰るという時には、参加者全員に声を掛けて代役をやってくれる人はいないかを呼びかけました。スタッフもリーダーも、お年寄りも青年も参加者全員が奉仕をしながら、そこでも色々な事を学んでいく素晴らしいシステムがマウンテンハウスにはありました。

午後4時のティータイムには、庭の芝生に三々五々人が集まり、さざめきが聞こえる、のんびりとしたごく日常の雰囲気の中で、お隣に座った方に「どちらから」と声を掛けるところから交流が始まります。各々のお国の話や、家族の話、食べ物、ファッション、あらゆる話題に花が咲いて、いつの間にかお友達に…。

そして夕食の後は、毎日楽しいプログラムが用意されていました。バラエティーショーでは、日本人総勢22名で花笠を持って盆踊りを披露し、日本文化を印象付けました。花笠や手ぬぐいが大人気で、浴衣を着せてとねだるフランス等のお嬢さん達も現れ、楽しい交流ができました。他にフォークソングやジャズセッション等、多彩なプログラムで夕べを楽しませてくれました。

<参加者の声>

・戦後初の代表団を送ってから60年という大切な機会に参加できて良かった。
・世界各国から多くの人々が集まり、全体会議や分科会で自分の考えを積極的に述べたことが印象的。
・分科会の進め方がとても良く、内容も充実していた。メンバーが打ち解けて率直に魂の話ができ、世界の問題解決もここから始まることを実感した。
・大切なテーマを平明に、楽しく伝える工夫が良かった。
・ディスカッションのテーマは本質的で、時代に叶った深い議論が展開できた。一人ひとりのライフストーリー（人生の転換点）は、各々に感動的で心の琴線に触れるものがあった。
・素晴らしいマネジメントでした。400人近くの共同生活を円滑に行えるマネジメントに接し、4つの絶対標準（正直・純潔・無私・愛）の下に、共同尊敬、相互信頼が生まれ築き上げられていると感じた。このようなコミュニティ、社会を築き上げていくことが、世界の平和の実現につながっていくと感じた。
・食事の時間に、色々な国の人々と話したが、特に年輩の人達では、若い頃からMRA（現IC）の活動に従事して来たという方が比較的多く、それほどまでに人々を惹きつけているICの活動に興味を感じた。
・献身的にICの活動を支えていらっしゃる方々がいて、勇気づけられた。日本にいると戦争、紛争等ニュースで知るだけだが、現実に悲しみや苦しみを聞いたことは、心にしみた。コーに集まることの意義を感じた。
・家族3代参加していることに豊かなICの魅力を感じた。うらやましくもあった。

生活の中で役立つことば②
「外科医は手術する時に、まず手を洗う」
：社会をよくしようと思ったら、まず自分を清くすること。
さもないとかえって悪化する。

ICセミナー（第17回ミニHOHO）開催のご案内

《予告》

静かな環境の中、企業でのリーダー経験者の講演を聴くと共に、メインテーマ「企業の社会的責任」について、その本質をじっくりと考え話し合える、1泊2日のセミナーを企画いたしました。是非、ご参加下さい。

テーマ　”企業の社会的責任（CSR）を考える”
期　日　2010年10月23日（土）～24日（日）
場　所　天城ホームステッド（日本IBMエグゼクティブ研修センター）

詳しくは（社）国際IC日本協会事務局までお問合せ下さい。TEL03-5429-1156

～岐阜でホームステイを受け入れて下さった太田和江さんより～

「国際ボランティアチーム岐阜滞在は大満足。彼らの滞在に居合わせた友人たちは、チームワークやマナーの良さ、コミュニケーションの豊かさに感動していました。また、次の機会を作ってほしいです。暑い中、私の友人と一緒に庭の草取りを夢中でしている姿が一番印象に残っています。ジャカさんが嬉しそうに野草摘みしていたことや、振袖を着てもらおうと計画したところ女性たちは3人3様の美しさに仕上がり、感動したこと等が思い出されます」。

〈入会のご案内〉

IC（Initiatives of Change…前身はMRA（Moral Re-Armament）。1938年にロンドンで発足して以来、〈対立する相手や国を変えたいと思うなら、まず自分や自国から変わるべきである〉という理念に基づき、あらゆる民族、宗教、文化の根底に流れる共通の倫理観（モラル）を普遍的な〈正直・純潔・無私・愛〉という4つの絶対標準としてまとめ、それをもとに世界各国で紛争等の問題解決に不可欠な相互の信頼関係を醸成する活動を進めてきました。国連の認定を受けた国際NGOとして、世界50カ国以上で活動しています。

▲ICハウス（東京都世田谷区）

○正会員（議決権を行使できます）
個人会員　年額　6,000円
法人会員　年額　50,000円
○賛助会員
個人会員　年額　3,000円以上
法人会員　年額　50,000円（一口）以上

会費・寄付金の振込先
1. ゆうちょ銀行
郵便振替口座番号　00180-0-38289
口座名　社団法人 国際IC日本協会
2. みずほ銀行渋谷中央支店 普通預金
口座番号　162-4945790
口座名　社団法人国際IC日本協会

@編集後記　今夏日本各地で最も熱い活動となった学校訪問の様子とスイス・コー国際会議に行った広報委員のマウンテンハウスでの感動等をお伝えしました。皆様からのご意見ご要望をお待ちしています。広報委員：海老原真美、岡本さくら、高橋久子、宮本由紀子、長野清志、弓場睦